

# 自然公園の諸問題に ROSはこう答える

ROSの考えを導入すれば、自然公園管理の様々な問題に的確に対処することができます。ここでは、大雪山国立公園を事例として考えます。

## ■登山道の荒廃

**Q.登山道の荒廃が目立ってきていますが、登山道を修復するかどうかの判断にROSは役立ちますか？**

Aはい、役立ちます。レクリエーション体験の質を守るといふ観点から、登山道修復のための基準を示すことができます。この問題では、荒廃による自然への影響を考慮することはもちろんのこと、そこを訪れる利用者の認識についても検討する必要があります。原生性の高い区域では、原生的な自然らしさを損なわない範囲で修復を行うことが求められますし、より利便性が求められる区域では、歩き易さを重視した整備が求められます。原生区域では周辺の自然との調和を最大限に守る必要がある中で、人工的な感じのする修復は行なえません。一方、整備区域では、人工的な施設の設置などもある程度許容されますから、コンクリートなどを使用して荒廃を防ぐための土木工事を行なうことも許容されます。たとえば、我々はトムラウシ山周辺を原生区域に区分することを推奨していますが、修復を行う必要がある場合には、自然らしさを極力損なわないように配慮した修復工事を行うこととなります。

## ■木道の設置

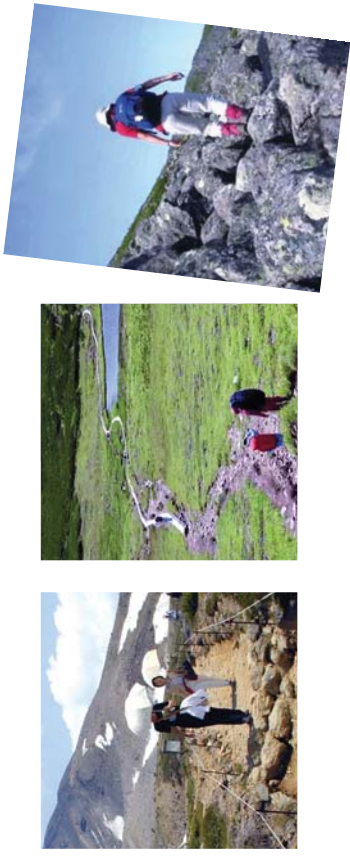
**Q.最近、高山帯で過剰な木道設置によって雰囲気が損なわれた、という批判があります。ROSはこの問題に対してどう答えますか？**

A.木道を設置する目的は、植生の保護と歩きやすさの確保にあります。しかし、歩きやすさを優先して必要以上に木道整備を行うと、高山帯の自然らしさが失われることとなります。本来、高山帯にある原生区域では、自然が保たれた雰囲気を提供するのが目的ですので、歩きやすさを確保するための木道設置は原則として行うべきではありません。たとえば、我々の試案ではトムラウシ山周辺を原生区域に区分することを推奨していますから、ぬかるんでも植生が維持される限りは木道の設置をしないことを提案します。ただし、植生の保護が必要な場所では、原生区域であっても木道を導入せざるを得ない場合があります。この場合は景観を保つようなデザインを採用して、高山帯の雰囲気を出せる限りの損なわないように配慮します。これに対して、整備区域では歩きやすさの確保を優先した木道の設置も可能です。

## ■バリアフリー化

**Q.国立公園だから登山道はできる限りバリアフリーにすべきだと思いますが、ROSではどのように考えますか？**

A.ROSではハンディキャップをもつ人たちが国立公園をもっと楽しめるように整備することを主張します。しかしながら、すべての場所をバリアフリーにすることはできません。それはROSが多様な人々の利用を前提としているため、すべての区域をバリアフリー化すると、ハンディキャップを持たない人々のレクリエーション体験の機会を損なうことになるからです。整備区域においては、人工的な施設の設置などもある程度許容されますから、バリアフリー化を行うことができます。しかし原生区域では、自然環境の保全およびレクリエーション体験の保全を考慮して、敢えてバリアフリー化は行いません。たとえば、登山道周辺は整備区域に区分し、車椅子でも散策できるようにバリアフリー化すべきと考えます。



## ■トイレ問題

**Q.高山帯のようなトイレのない場所で利用者のし尿が問題となっています。ROSはこの問題に対して解決の糸口を提供できますか？**

Aはい、できます。高山帯でのし尿問題は、利用者の増加によって、自然の分解スピード以上にし尿が増えたことによって生じています。対策としては2つが考えられます。1つは利用者の増加を前提として、し尿処理をトイレの設置によって解決する方法です。もう1つは利用者の入り込み数を抑え、自然が分解できる程度のし尿の量を常に守ることです。これらの解決策をROSの立場で考えると、前者は多くの入り込み数を許容するゾーン（整備区域）として区分し、トイレを設置することになります。これに対して、後者は利用者の入り込み数を規制したり、し尿を持ち帰ったりすることによって、し尿量をコントロールするゾーン（原生区域）として区分することとなります。たとえば、我々はトムラウシ山周辺を原生区域に区分することを推奨していますが、そうなるとここではトイレは設置せず、入り込み数を抑えたり、携帯トイレの使用を促したりする対応を採ることになります。